

全ての教科の根っ子にある**国語**力を高めます。

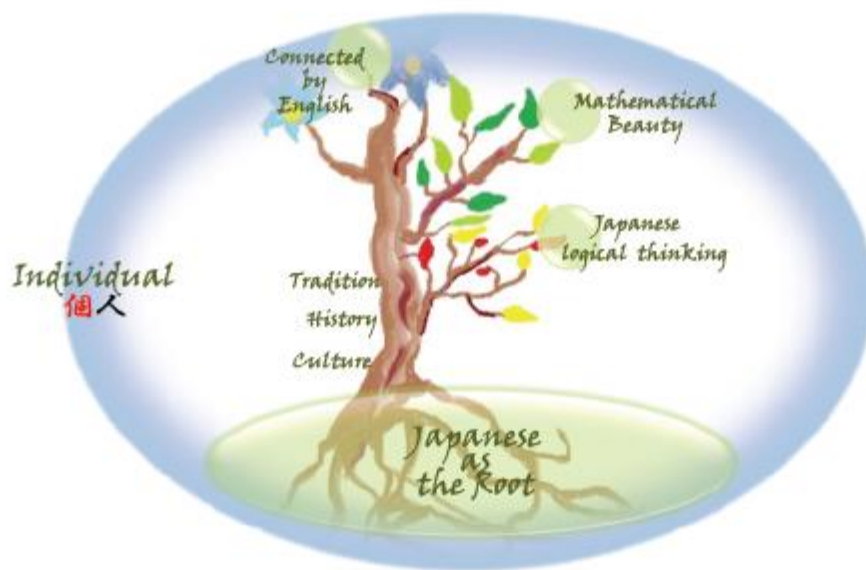
そして

社会と主体的に関われる**個人**を育てます。

それが

国語**個人**指導専門
アゴラ

の学びの広場としての役割です。



ご挨拶

この度は「国語個人指導専門 アゴラ」「難関大医進専門 AGORA」（「アゴラ国語（略称）」）のパンフレットを手にとっていただき有り難うございます。

はじめに

「物（もの）事（こと）の本質を見抜く力」

この点こそが各受験科目で問われていることです。

国語の場合、「どういうことか」「何故か」という形で本質へのアクセスを促します。

ために最近の東京大学の問題を掲載します。

2013年度（現代文）

- (一)「もっぱら自分が抜き出し、読み取ったと信じる意味内容・概念の側面に注意を集中してしまうという態度を取ってはならない」（傍線部ア）とあるが、それはなぜか、説明せよ。
- (二)「はるかに翻訳者による日本語作品である」（傍線部イ）とはどういうことか、説明せよ。
- (三)「原語と母語とを対話させる」（傍線部ウ）とはどういうことか、説明せよ。
- (四)「翻訳という対話は、ある新しい言葉づかい、新しい文体や書き方へと開かれている」（傍線部エ）とあるが、なぜそういえるのか、説明せよ。
- (五)「翻訳という営為は、諸々の言語・文化の差異のあいだを媒介し、可能なかぎり横断していく営みである」（傍線部オ）とあるが、なぜそういえるのか、本文全体の趣旨を踏まえた上で、一〇〇字以上一二〇字以内で説明せよ。

さらに注目すべきは「本文の趣旨に従って」「本文の論旨を踏まえた上で」という文言です。これは「どういうことか」「なぜか」の答えが近視眼的妥協ではいけない、ということを戒めていると読むことはできないでしょうか。

ともすれば、私たちは易きに流れやすいものです。これが民衆ならば「日々の生活に追われ」致し方ないこともまま、あるでしょう。しかし社会のリーダーはそういうわけにはいきません。皆さんはリーダーになるべき人材です。

この国の屋台骨を支えてきた人材を輩出し続けてきた大学が、反省と期待を込めて受験生に何十年も同じことを問い続けることの凄味が伝わってきませんか。

「どういうこと?」「なぜ?」その答えの更にその先を問え!

ここまでの件（くだり）は何度も目にしたことがあるでしょう。

2013年の問題文は（湯浅博雄「ランボーの詩の翻訳について」）からです。

この文章は私達がいかに問題を読み、どう解決へと向かうべきか示唆的な文章となっています。

掲題の通り、「翻訳」のあり方についての文章です。他言語を母語にという本来の語義通りの「翻訳」にとどまらないところがこの文章の面白いところです。

例えば、私達の日常にある翻訳の風景を考えてみましょう。オリンピック・アカデミー賞・トニー賞・政治的行事等、通訳の方がリアルタイムの臨場感を伝えてくれます。通訳は口語、翻訳は文章を言い換えるとよりわかりやすいでしょう。ただ翻訳の示す世界はもう少し深いようです。

詩人・作家のテキストを翻訳する者は、次のような姿勢を避けるべきだろう。つまり翻訳者が、むしろ原文テキストの読解のために、いったんそのテキストの語り方の側面、意味するかたちの側面を経由して読み取るのは当然なのであるが、しかしこのフォルム的側面はすぐに読み終わられ、通過されて、もうこの〈意味するかたちの側面〉を気づかうことをやめるという姿勢は取るべきでない。もっぱら自分が抜き出し、読み取ったと信じる意味内容・概念の側面に注意を集中してしまうという態度を取ってはならない。そうやって自分が読み取った意味内容、つまり〈私〉へと伝達され、〈私〉によって了解された概念的の中身・内容が、それだけで独立して、まさにこのテキストの〈言おう、語ろう〉としていることをなす(このテキストの志向であり、意味である)とみなしてはならないのである。

翻訳者は、このようにして自分が読み取り、了解した概念的の中身・内容が、それだけで独立して(もうそのフォルム的側面とは無関係に)、このテキストの告げる意味であり、志向であるとみなしてはならず、また、そういう意味や志向を自分の母語によって読みやすく言い換えればよいと考えてはならないだろう。

戒めでしょう。翻訳産業花盛りとも聞きます。わかりやすく、よりわかりやすく。これは非難ではなく、感想として受け取ってもらいたいのですが。大学時代、私の生活のかなり深いところまで「外国文学」に占拠されていました。特にロシア文学、中でもドストエフスキーだけは、私を現実から引きちぎるほどの強い力で、かの地のかの人々との交歓を可能にしました。その読書体験の流れの中である一冊の本に出会います。

「カラマーゾフの兄弟」です。そこには人間が断片的に描かれているのではなく、人類が脈の中で描かれているようでした。「僕も人類の一員なのだ。」という気付きと興奮はしばし青年を、現実に戻すことをためらわせたほどでした。

その時私は不思議な体験をします。そこは真冬の京都。立命館大学・双ヶ丘寮、談話室です。石油ストーブの残り火が急激に寒さを集める中、本を読み終えた僕は、一人ボーっとしていました。カーテン越しに薄明が差し始めています。一人、本を読み終えてどんな顔をしていたのでしょうか。ちょうどそこに、僕に「ロシア文学いいぞ」と勧めた友人のA君が眼をこすりながらドアを開けて入ってきました。僕と目が合うと彼は一言こんなことを言いました。

「カラマーゾフを読んだ顔をしているな」一言残して出て行きました。特にそこに何か特権的な意味を付与しようというわけではありません。暗黙の了解は他者との精神的つながりが「カラマーゾフ」を介して成立したという象徴的なことなのではないでしょうか。

その日、僕は勝手に「読書体験の終了」を決めていました。もうこれ以上の感動はないし、まるで人間を

「カラマーゾフを読んだ人間」と「読んでない人間」に分別してしまう青春の傲慢に身をおくことになるとは思いませんでした。でも今でも多少そこは否定出来ないところでもあります。

その後10年ほど前にK文社というところから別の翻訳者による「カラマーゾフの兄弟」が刊行されベストセラーになりました。もちろん読んでみたのですが（途中で投げ出しました）何故か？引っ掛かりがないのです。ストーリーテラーの文章を読むがごとくすべてがすんなり理解されるのです。立ち止まって、意味を考えるとというか、そうせざるをえないかつての新潮・原卓也版に感じた「ロシア」や「ゾシマ」や「アリョーシャ」「イワン」の風土の重さ・匂い・汚らわしさ、特に「大審問官」だけは如何ともしがたい。よくキリスト教的知識を持つべきだと、知識、観念的なことを勧める方もおられますが、原版は僕の印象では僕の内側で肉の体験として実感できる、「私の重さ」への自覚でありました。（観念的であろうとする私と自身の肉の存在をなめ尽くそうとする間で揺れていたように思います）

翻訳者は、原文の〈意味する仕方・様式・かたち〉の側面、表現形態の面、つまり志向する仕方の面を注意深く読み解き、それを自国語の文脈のなかに取り込もうとする。しかし、フランス語における志向する仕方は、日本語における志向する仕方と一致することはほとんどなく、むしろしばしば食い違い、齟齬(そこ)をきたし、マサツを起こす。それゆえ翻訳者は諸々の食い違う志向する仕方を必死になって和合させ、調和させようと努めるのだ。あるやり方で自国語(自らの母語)の枠組みや規範を破り、変えるところまで進みながら、ハーモニーを生み出そうとするのである。

こうして翻訳者は、絶えず原語と母語とを対話させることになる。この対話は、おそらく無限に続く対話、終わりなき対話であろう。

翻訳は「これでよし」と止まることは永遠にできないということだ。作者独自の文体によって彼が語ろうとする真意を、翻訳者が母語への翻訳で静止させることを許さない。なんと厳しいことでしょう。

「名詞を動詞化する」という考えを僕はよく用います。名詞は世界から切り取り、ひとつのテーブルの上に乗っけるための便宜です。分節化はみなさん聞いたことがあるでしょう。止まっているから共通のテーブルに乗っけて、腑分けして意味を観念的に付与することができます。それを共有する。

「自然(nature)」の大本は、ラテン語のナトゥラ「natura」といって「産出する」動きを表した言葉だったようです。当時の人の目にダイナミックな世界が広がっていたのでしょう。それがその「産出する」動き(動詞)によって産み出された個々の物を指すようになります。それが今の私達が使う「自然」(名詞)へとつながっていくわけです。

「自然」を力動的な世界に還元した時、私達はもっと眼差しを、自然を見て終わりから脱却する必要があるように思います。これは観念ではありません。

最後に作者は「翻訳」がこれでよしという「私」の怠惰を戒めることを忘れません。人間は傲慢です。これでよし。として権威であれ、他者の評価によって得られる自身であれ、「これでよし」ととどまり、「動き続ける」「運動としての思考」をせず「情報の軽さに肉の重さを解消させる」ことで「これでよし」と決めつけます。

軽薄な個人です。

重厚な個人はもっと底に向かい、底が光っているものです。

もっと大きなパースペクティブ（遠近法）において見ると、諸々の言語の複数性を引き受けるということ、他者（他なる言語・文化、異なる宗教・社会・慣習・習俗など）を受け止め、よく理解し、相互に認め合っていかなければならないということ、そのためには必然的になんらかの「翻訳」の必然性を受け入れ、その可能性を探り、拡（ひろ）げ、掘り下げていくべきであるということに結ばれているだろう。

翻訳は諸々の言語・文化・宗教・慣習の複数性、その違いや差異に細心の注意を払いながら、自らの母語（いわゆる自国の文化・慣習）と他なる言語（異邦の文化・慣習）とを関係させること、対話させ、競い合わせることである。そうだとすれば、翻訳という営為は、諸々の言語・文化の差異のあいだを媒介し、可能なかぎり横断していく営みであると言えるのではないだろうか。

翻訳とは、異国を、母語を通じて自国に顕現させることである。そこには異国が異国のまま。私達の前に現れなければならない。そこで翻訳者の作為を作者は否定する。観念的であれ、肉体であれ「往来」を通じてのみ、しかも永遠の往来によってのみ、さしあたりの異国を示すことになる。しかし、「止まったら」動かさねばならない。その先に異国を丸抱えで伝え得る何がしかの「一時的帰結点」が見つかる。と筆者は言っているのである。さしあたり、文体を通して観念と一線を画す肉の重さの真実に、それに刻み込まれた諸々に、私達は真実の地平に向かうことが出来る。

最後に社会システムであれ、FBの「いいね」であれ、ネットであれ、私達は「重さ」のない「情報」にこの $E=MC^2$ におけるMの肉の質量が動かされていることを時折自覚しなければなりません。死は重さのあるこの肉体に生じるのです。

今一度、この重量に人生の当たり前を見つけてみよう。M（重さ）の消失が死なのだから。

アゴラ国語の本質

「アゴラ国語個人指導に含意されていること」

アゴラは古代ギリシアの言葉で「人の集まる所」を意味し、市場や集会所などがある公共広場を指しました。そこでは全ての人々が自由に議論し合い、生活の中心として政治や経済、文化の拠点として機能しました。

集う人々が個人として尊重された「広場」だったと思います。何も知識を得るためだけではなく、心身疲れたれた人がリフレッシュのために訪れたかもしれません。アゴラ国語もそのような厳しくも暖かい場であってほしいと願っています。

更にアゴラ国語では「自主的」と「主体的」を明確に分けて考えています。

「自主的」とは、やらなければならないことが明確で、その行動を他人に言われなくとも自ら率先してやることです。

具体例

「私は先生や先輩、親に言われなくとも、課題をちゃんとやる事が出来ます」

つまり、「自主的に動け」は、言い換えれば「同じやるなら、やれといわれてからやるのではなく、自分でやろうと思ってやれ」ということになります。多くの生徒はこのレベルで留まっています。

「主体的」とは、何をやるかは決まっていない状況下、自分で考えて、判断し行動することです。

具体例

「私は課題の目的を考えます。そして、目的が『大学に合格するための得点力を向上させること』と定義したら、課題をこなすための時間を有効にするために、方法を工夫します。例えば考えてもわからない問題は先に解説を見るとか。あるいは、根本的なことがわからない、あるいは既習分野である。というような場合、新たな課題をもらうか、別の参考書で概念理解や演習量を増やすことをします」

つまり、「主体的に行動する」とは、「状況を判断して、自らの責任で最も効果的な行動をとる」ということです。

思考の源泉である国語という名の母語でもって、あらゆる領域を縦断する力を得る。

本来国語がすべての教科の基本という時はこちらの意味である。

その力を充実させて私達は社会の一員としての個人の独立・主体性を獲得する。それがひいては他者へのおもいやりの源泉となり、社会に希望を見出せる未来づくりの担い手となる。

最後にアゴラのメンター（講師・先生）について説明します。（14、25 ページで紹介しています）

生徒に先生の力量は理解できません。断言します。

そんなことはないという生徒はそんなこともあるかもしれないという見方も必要でしょう。もちろん「後生畏るべし」という言葉の意味するところを知った上で改めて注意喚起したいわけです。

〈私〉が捉え得た他者の評価をある「名詞」でとどめてしまっただけでは、他者の真意（本当）近づくことを自ら放棄することに違わない。

一種、時代が産んだ「信者型教育」です。生徒の皆さんに一つ注意があります。

「他者を自分のものさしで決めつけないこと」です。

「先生」は生徒によって変化していきます。教育的ポリシーの強い「底光る人々」は生徒の意見を真摯に聞き取り、長いスパンでの成長に思いを馳せて、「今、ここで」すべきことを伝承する力があります。但しレベル・内容に応じて「引き出し」を多く持っているため、生徒の「意識の高さ」に引き出そうにも引き出せない場合も多々あります。

学校の先生にも忸怩たる思いで生徒と接している方も多いと思います。添削をお願いしたりして生徒の「やる気」で先生の「深い高い引き出し」を開けさせると良いです。先生の無上の喜びとなるでしょう。

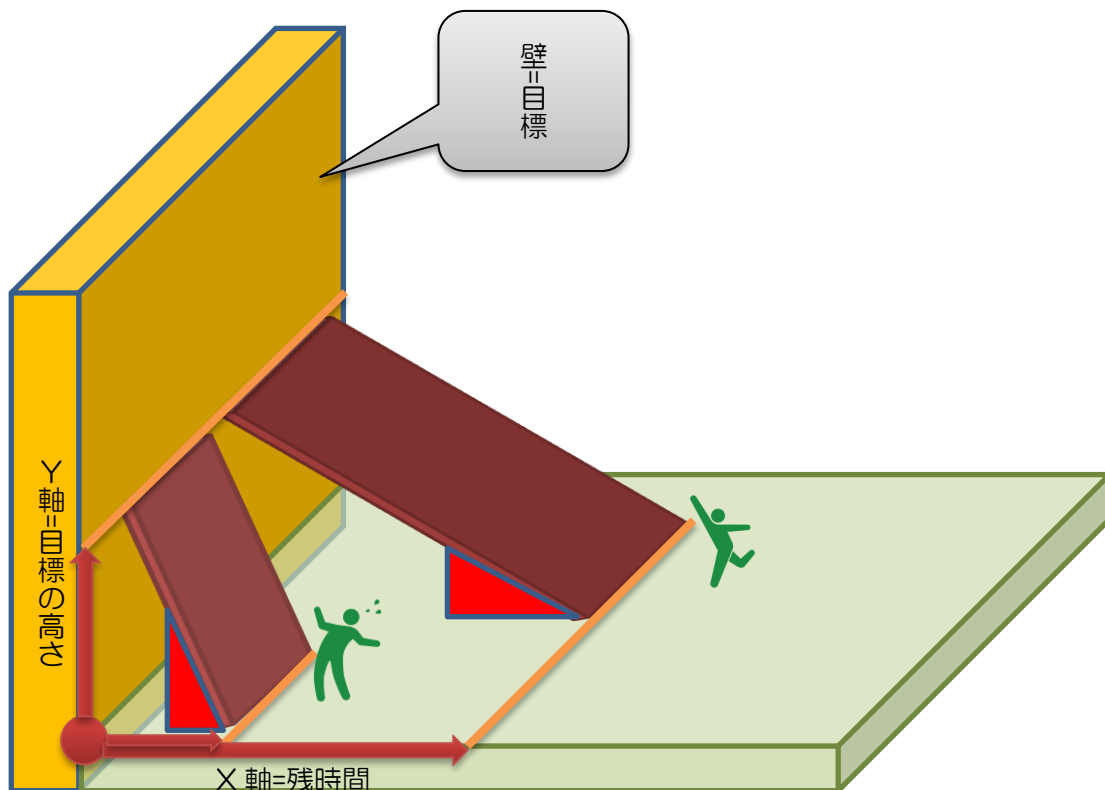
アゴラスタッフの更なる特徴は

- ①教科体系の背骨を作る力がある。
- ②小学生から大学受験まで指導可能。
- ③教育の専門家として「人間愛」に基づく厳しさを生徒に接する。

そこ（底）の光る皆さんの良い所を「そこ」と指差せる先生方です。安心して先生とのコラボレーションを楽しんでください。

1

今自分の立っている場所



目標に対する自分のポジション



1 目標が高すぎる。

2 残時間が少ない。



3 目標に対して適切な残時間。

1や2の状況では登ろうにも滑り落ちるのが落ちでしょう。

3は1・2に比べて余裕があります。受験準備がうまくいく可能性は高いです。

Point 1

現実をしっかりと見て、これからのために「今、何をすべきか」よく考え、計画を練りましょう。

2

Top(頂上)を目指すということ

山登りに例えて話を進めてみましょう。

私は学生時代ロッククライミングをしていました。その練習の一環で中央アルプスの「宝剣岳」という山に登りました。その詳しい話は拙ブログ『Alloha!予備校講師は語る。。。』に書いてありますので、興味のある方は是非、ブログ内で検索してお読み下さい。

その時、私の目に映ったことを時系列で、受験に重ねて書いてみます。

2-1 高い山はよく見える

頂上というのは不思議なものです。最初「宝剣岳」の山頂はこのように見えました。



左上の山です。手前の緑「千畳敷カール」(別名:お花畑)、蒼天、ところどころ残った残雪が日に輝いていました。青を突っついている岩山の先端がこれから登る山です。美しい。

受験も一緒です。離れているから「登りたい」し、高ければそれだけ「良く見え」ます。

2-2 いざ登り始めるとしばらくは、上の風景が続きます。ところが一旦岩肌に取り掛かるとそこに



「美しい頂上」はありません。見えないのです。頂上に近づけば近づくほど見えないのです。

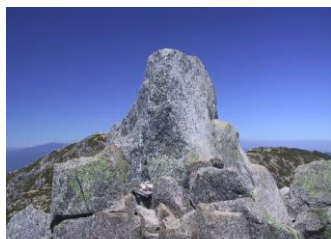
目の前には岩があるだけ。ほぼ垂直に近い場所もあります。もちろん「鎖」があって、それを頼りに三点保持で登るだけですから、言うほど大変ではありません。問題は頂上が見えないことです。ここで不思議な感覚にとらわれます。「この岩登り、楽しい。」頂上の事はしばし忘れて目の前の現実に没頭しています。でもだんだん疲れるというか、飽きてきます。が、戻るわけには行きません。

「ただ登るしか、あらへん」(諦念)

「この岩と頂上の岩は一緒なんやなあ」(哲学的気付き)

2-3 頂上が見えた、立った。。。でも

とにかく滑落しないように。必死で鉄の鎖をぐいと引き寄せる。ひたすら前へ、前へ。後ろを振り返る、というか真下を見る余裕もありません。幾時間か過ぎて。。。やっとな。



これが山頂です。大人一人がやっとな立てる広さです。

もっと何やら壮大なものを期待していたのですが、意外にチンケなものでした。

でもこの甘い感傷が後で痛い目にあうことになります。ブログに続きは書いてあります。

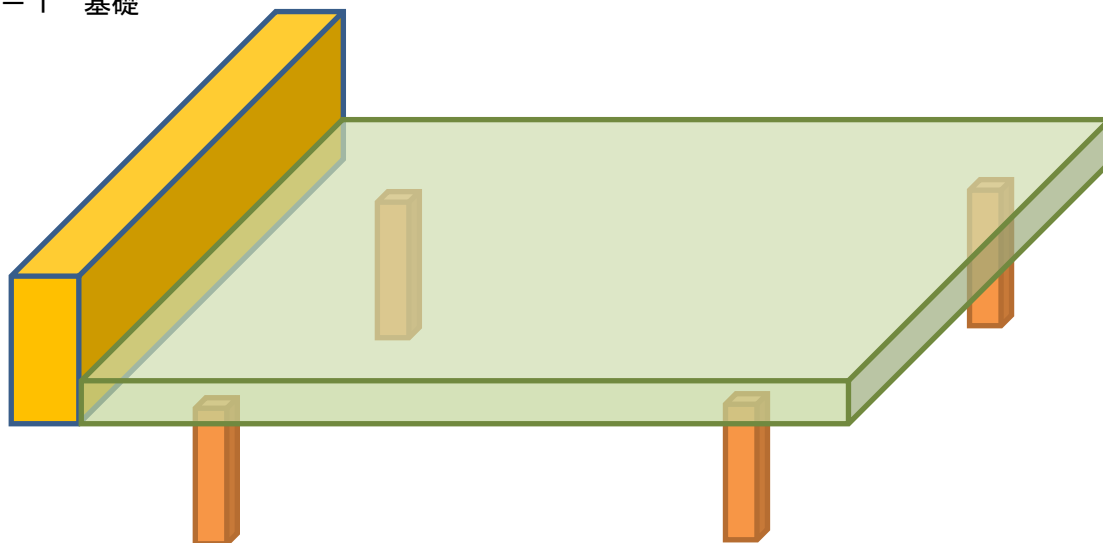
Point 2

当たり前の先の頂上。でも立てる数は決まっている。

3

基礎と基盤

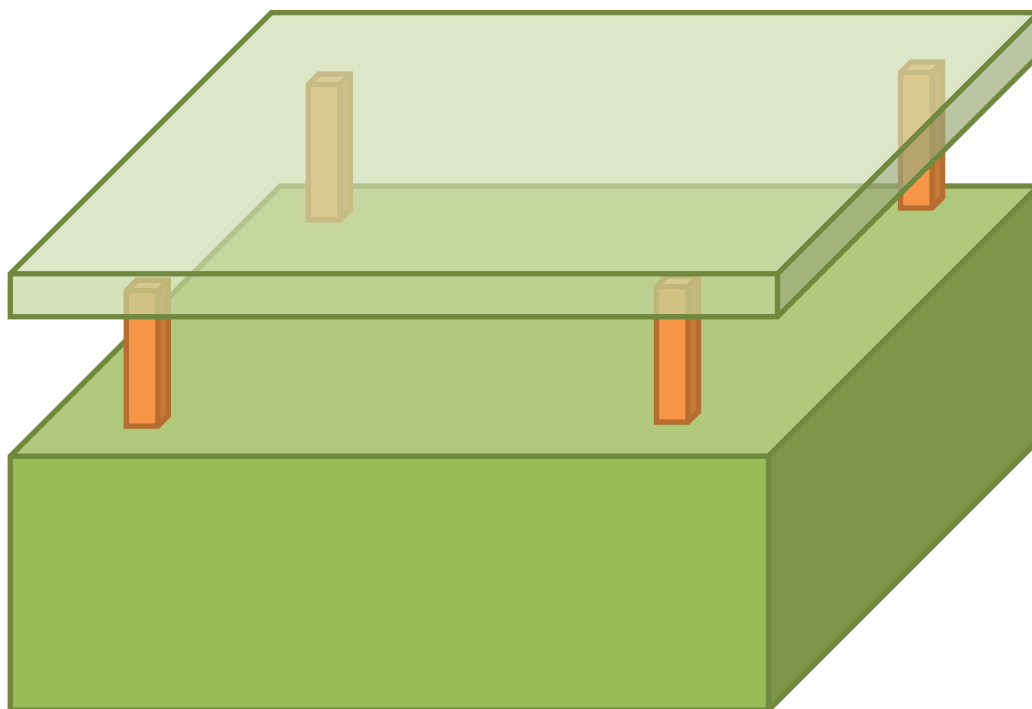
3-1 基礎



基礎は構造物の強度、形状を決定づける極めて重要なものです。教科体系を作り上げる「概念」と言い換えてもいいでしょう。数学などは極めて抽象化の進んだ世界共通言語です。「数の概念」と考えると、「自然数」「整数」「0（ゼロ）」「少数」「分数」（ここまでは小学生で学ぶと思います）。。「虚数」「素数」etc

3-2 基盤

基礎の乗る土台が基盤です。脆弱であれば、構造物も建てる先に壊れます。昔は人力で土を叩いて固めたそうです。これを「土方（どかた）」と言いました。美輪明宏「ヨイトマケの唄」のヨイトマケはその意味です。要は「力仕事」。頭より体を使う。自力で時間をかけて「憶える」。



Point 3 基盤一番！習うより慣れろ！

4

受験は総合力

ある教科が好きで、やればはまるし、わかれば楽しい。時間の経過は集中力の証。

その集中力を否定する気は全くありません。私も性質(たち)でいうとそんなところなので人様をとやかく言えません。但し、「受験」となると話は別です。国語だけで合格を判断したことはありません。他の教科にしてもそうです。ここでは数学と英語についてお話させて下さい。

さきのある教科というのは数学です。これはエンドルフィン出まくりの教科ではないでしょうか？逆に出ない現実を見せつけられると怖い面もありますが。それはずっとずっと先(?)のことでしょう。今はやればわかる、無邪気な「はまった」時期にあるのではと思います。かつて数学主体の塾で働いたことがあります。「数学」をこれでもかと細分化して、学習スケジュールに乗っけるのです。見た目はたくさん学べて、中位の成績の子には「はまる」要素満載の仕掛けが施されています。

とにかく「多種」「多量」なのです。

それが悪いの？またお叱りを受けそうですが、ここは「受験という制限付きの「場」の中での話だとお考え下さい。「多種」を「基礎」と「基盤」に分けることが出来るとして、「自力」で出来る部分は果たしてないのでしょうか？あるいは良質の問題を選択することで極力「少種」の形で授業時間の節約はできないのか？

その節約が生む効果は計り知れません。

「主体性」が芽生えるからです。アゴラに通うある生徒が前に通っていた予備校(上の塾とは違いますが)と比較してこんなことを言っていました。

「前は授業を受けていたけど、今は勉強している」さらに「早起きになった」成績は自ずと伸びていくでしょう。あとはメンターのサポートだけです。

さて話が横道にそれましたが、数学好きな生徒が疎かにしがちなのが英語です。「多読」だけで受験を乗り切れる？無理だと思います。必ず英語の先生の「肉声」(英作添削含め)が必要です。英語は言語です。その観点から2種類の生徒を想定することができます。

- ① より早期に言語としての英語をマスターした生徒。
- ② 日本語にどっぷり使って生活してきた生徒。

②の生徒に必要で①の生徒に必要でないもの「文法」でしょう。

いろいろなところで目の敵にされがちな「文法」ですが、もうその年で英語による情報を理解しようとするのなら「英文法」は英語体系を理解するために、必要なものではないでしょうか。要は文法が背骨です。私たち日本人の背骨が日本語であるのなら、英語による情報を理解するために、その背骨を使って肉付けするに越したことはありません。だから大学受験に文法関連の問題が多々あるわけです。日本で活躍するパクンマクンなど多くの外国人も日本語の文法を勉強したそうですよ。

でも、これも先の話どうなるかわかりません。日本人が日本語(漢文や古文も指します)をアイデンティティの拠り所としなくなった時、もう背骨は日本語である必要もありません。

思考も日本語で行う必要もありません。その時果たして「日本人」は日本人なのでしょうが？

「今の多数の日本人に必要な英語情報を活用するための最善の方法」と考えて割り切ることで。

Point 4

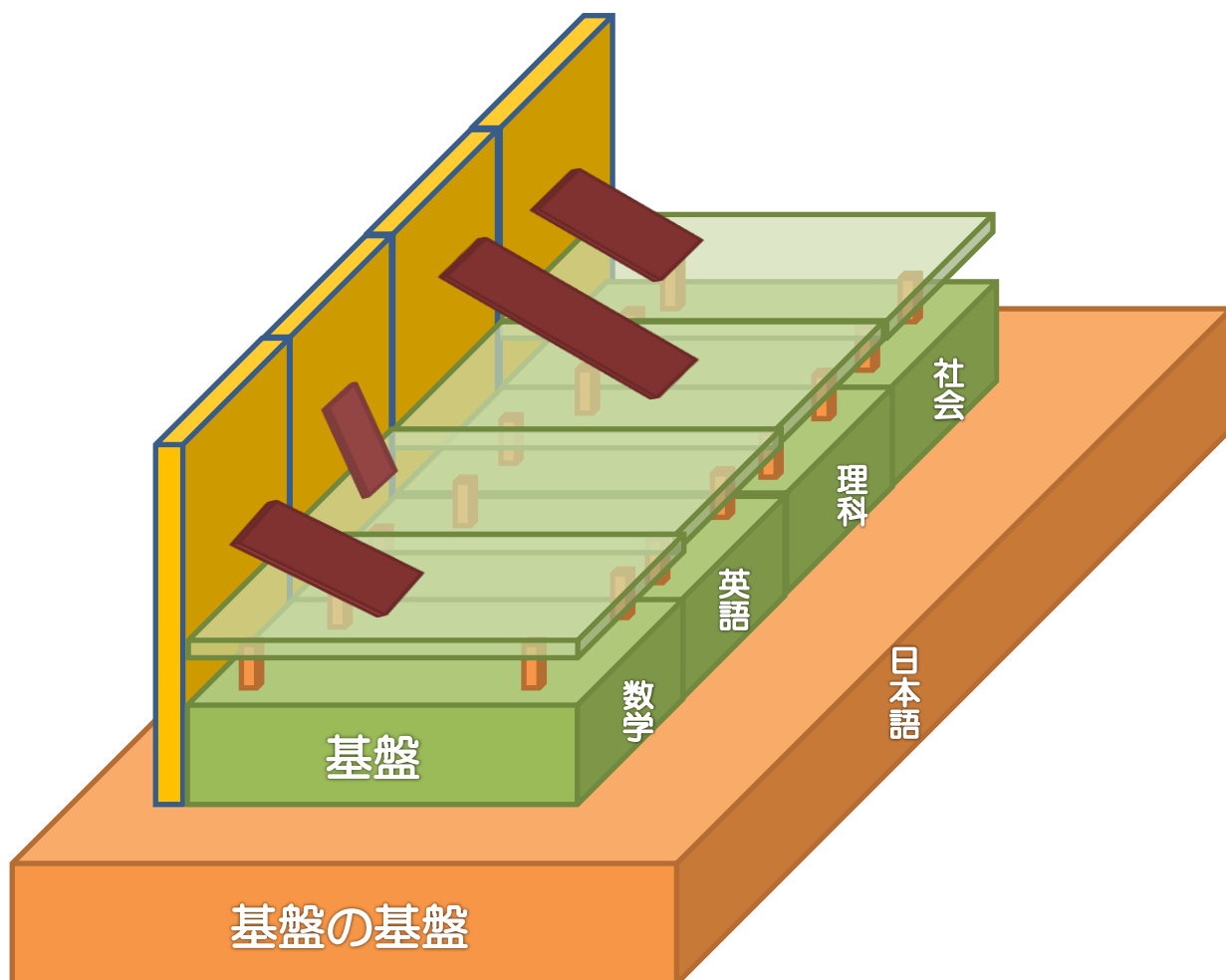
好きだけ、物の上手なし！

5

結局、日本語なしでは何も始まらない

下の図は各教科の連動をイメージしたものです。

一つの教科の基盤が悪ければ、たとえ離れていても他の順調な教科の山登りにも悪影響を及ぼします。すべては繋がっています。そして我々日本人にとっての母語である「日本語(国語)」こそが、概念理解の大前提という意味で「基盤の基盤」ともいうべき領域なのです。



Point 5

思考の源泉である国語という名の母語で、あらゆる領域を横断する力を得よう。



アゴラ国語**個人**指導 に込めた思い

次の2つ意味があります。いずれもアゴラ国語の大切なメッセージです。

- ① 教科の「国語」を集団ではなく「個人指導」する。
- ② 母語としての国語で社会に対して個人を育成する。（真意）

思考の源泉である国語という名の母語でもって、あらゆる領域を縦断する力を得る。本来国語がすべての教科の基本という時はこちらの意味です。

その力を充実させて私達は社会の一員としての個人の独立・主体性を獲得します。それがひいては他者へのおもいやりの源泉となり、社会に希望を見出せる未来づくりの担い手となると信じています。

この2番目が「アゴラ」本来 「国語**個人**指導」に含意された内容です。
ならば、

教科としての国語

教科としての英語

教科としての数学

が必要となることは目に見えています。

ですからアゴラでは高いレベルの「国語」「英語」「数学」を提供しているわけです。

「高い」とひとこと言っても何のことやらわかりません。教授力のことでしょうか？わかりやすい授業ができるということでしょうか？若者の中にあっても一番成績がいいということでしょうか？権威ある賞をもらったということでしょうか？著作をモノしているということでしょうか？メディアで活躍していることでしょうか？おそらくこれらの側面はすべて「高い」レベルと思わせる見た目であることに間違いのないでしょう。

仮に、上に上げた人々に「あなたは高いレベルの学力をお持ちですか？」そう尋ねたとして、その多くの方は「NO」と答えるでしょう。

社会というのは「外圧」「内圧」「身体」「精神」「経済」「社会情勢」「地理的特性」「インフラ」等々、数々の流動的要素に満ちあふれています。「明日、いかなる風が吹くのか、うかがい知れぬ不確定要素満載の社会」です。「高い」も相対的な位置です。そこに無自覚にとどまり続けると、いつの間にか「高い」から追い落とされてしまいます。そう言うしか方法がないので「高い」と書きましたが、それは他者と比較しての位置づけのことではありません。お伝えしたかったのは、

「そこにとどまることを是としない」という意味での「高い」なのです。

Point 6

動かさせ！そして、考え抜け！その先に
主体的個人と成熟した社会はある。



アゴラのメンター（先達）について

今更、アゴラではどんな先生が教えているかということは説明の必要もないでしょう。

「地味な」先生ばかりです。生徒に先生の力量は理解できません。断言します。

そんなことはないという生徒はそんなこともあるかもしれないという見方も必要でしょう。もちろん

「後生畏るべし」（自分より後から生まれてくるものは、年が若く気力もあり、将来への可能性をもっているから、一生懸命学問に励んだら、その進歩は畏敬するべきものがあると言うこと。出典『論語』）という言葉の意味するところを知った上であらためて注意喚起したいわけです。

自己が捉え得た、他己の評価を、ある「名詞」でとどめてしまつては他者の真意（本当）に近づくことを自ら放棄することになります。

一種、時代が産んだ「信者型教育」です。闇に射す上方の光になりふり構わず向かっていって、間違いに気づいた時ははるか地上を離れ足もとがおぼつきません。だから「人を決めつけない」ことです。

「先生」は生徒によって変化していきます。教育的ポリシーの強い「底光る人々」は生徒の意見を真摯に聞き取り、長いスパンでの成長に思いを馳せて、「今、ここで」すべきことを伝播（でんぱ）する力があります。

アゴラ教科講師の特徴は

- ①教科体系の背骨を作る力がある。（概念化の重要さを熟知している）
- ②小学生から大学受験まで指導可能。（教科の根幹を伝える言語的アプローチに長けている）
- ③教育の専門家として「人間愛」に基づく厳しさで生徒に接する。

数学：岡本 和成（京大理学部数学科）※ 伝説の1969年入試（翌年まで影響あり）…学生運動による東大入試中止の余波が京大・東工・一橋に優秀な生徒を集めたとされる。その時代は京大の黄金期でもあった。後にフィールズ賞を受賞した森重文は東大入試が中止になったので京大入学。湯川秀樹・朝永 振一郎等が教鞭をとっていた時代。（指導歴45年）

数学授業概要

『直行数学』

数学の世界には一握りの「天才」と呼ばれる人たちがいます。たいへん優秀な才能を持った、一握りの人たちです。そういう天才には及ばなくても、受験数学くらいは楽に解いて志望の大学へ直行で合格できるような名付けて「直行数学」を目指します。

もちろん人類の遺産たる数学の勘所ははずさないようにするつもりです。それはペダンティック（学識を振りかざす）なものではなくどっしりした考え方とでも言うべきものです。

英語：座波 正（(Dynamite ZAHA) ※琉球大学で学園祭荒らしのロックバンド「〇〇〇バンド」リードギター。国家試験合格を蹴って民間教育機関へ。もとは理系。博覧強記。東大理科Ⅲ類のエキスパートナビゲーター。英語のみならず、あらゆる教科の指導ができる。生徒の面倒見は硬軟取り混ぜた個人対応型で生徒の信頼は厚い。（指導歴35年）

英語授業概要

『構造重視の体系英語』

入試英語は直線的学習で階段を登れば力がつくというのは間違った学習である。いわゆるボトムアップ式の学習では相乗効果が望めない。

トップダウン式の最高到達点から逆算して学習計画を立て、その時点ですべきことを確実にこなしていくことだ。

英文を理解するためには英文の「構造」に着目できなければならない。いわゆる部分と部分の「関係性」である。その実践力養成の前提にあるのが、文型や基礎的構文の繰り返しの学習で英文のパターンの習得に努めることだ。その時、何より重要な事は、単語の意味、イディオム、文法事項、構文などから導出できる逐語的訳を第一に行うということ。これは一切の妥協のない学習履歴がそのまま問われるものであり、それができて構造的訳へと道を進めるべきである。

国語：上江洲 朝也（立命館大法律学科）※ アゴラ国語 主宰。西一戸。入学式は新入生総代。「大学生たるもの権力へのレジスタンスに美を見よ」と述べ、一部から熱狂的に支持。語学教授と馬が合わず学内放浪。「筋ジストロフィー」患児との交流の中で「死」への洞察が深まり、結局、「法による人間関係の解釈」から「絶対的孤の存在同士が生死を介して結ばれる共感世界」への憧れへと転向する。その後、莊子「無用の用」への傾倒。（指導歴 35 年）

国語授業概要

『〈場〉の設定と〈対（つい）〉概念』

思考の基盤を作ること。これは先の説明で行ったとおりです。「基盤」は「基礎」を、その先の「構造物」を、根底で支える「力の源泉」です。目に見えないがゆえ、支えであるがゆえ、次の点に意識を向けるべきでしょう。

- ① 傍線部の拠って立つ文脈を常に意識すること。[文脈依存・構造]
- ② 対概念を軸に文章を構造化し立体視すること。[隠された一項・三段論法・弁証法]

自ずと次のことが導かれます。

- ③ 一貫したテーマのもと一つの主張が根拠を伴って現れる。[通底するテーマ]

それらの「運動としての思考」は主体的であり、社会性を帯び、世界に彩（いろどり）を与えます。

私たちは現実とどう向き合い、どんな問題点があるか、それに対してどんな答えを導き出せるかという「考え方」の基本を学ぶことができるでしょう。そこにもし普遍性があるとするのなら、「現実の課題」とは、決して「私だけの課題」なのではなく「社会の成員皆が幸福を追求する上での妨げとなる問題」となります。ですからこうも言えます。

国語の学びは社会の幸福度を上げる！

Point 7 アゴラのメンターは等身大で嘘をつかない。それが生徒との併走を許される第一の条件である。

8

2014年のセンターで起きた興味深いこと

まず、下記の数字をご覧ください。

	アゴラ現役平均点	全国平均点	偏差値	超有名進学校 私立N高校（兵庫）
英語	159点	118.87点	59.8	178.6点
数1A	85点	62.08点	60.5	92.8点
数2B	83点	53.94点	62.6	92.9点
国語	135点	98.67点	63.5	137.6点

昨年度2014年センター試験本試験受験の現役生の結果です。毎日通塾していた生徒に限っていません。

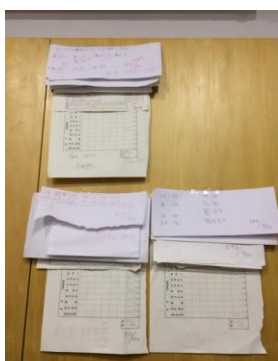
N高校の得点ですが、英語・数学は9割。国語は6割8分です。彼らが特別に劣っていたということはないでしょう。国語以外の教科は9割前後です。

国語の平均点はとうとう100点を切ってしまいました。更に50万人受験して満点の200点が一人もいない。最高点は195点です。前代未聞の出来事です。

予備校で国語の教科以外を専門に教えておられる先生は「国語得意」と勘違いしている方も多く見受けられます。この4・5年です。国語が難化したのは。それまでは超人高校生でなくとも180点は何となく取れたものです。その感覚にしがみついている方があまりに多い。もちろん出来る人は出来ます。ただ、普通の秀才はもちろん通常人レベルにとって、高く目の前にそびえるものがあります。

制限時間 です。

80分で現代文（更に評論文・小説に分かれます）・古文・漢文（中国の古文です。中国人も読めません）の三領域を塩梅良くこなさないといけません。捨てる勇気も必要で、ところがいざ捨てようという段になると、ここまで考えたのだからと逡巡する。漢文はかつて簡文と言われ生徒の得点源でした。しかし、昨今の漢文を見るに、語法をやればどうにかなるという時代は終わったように思います。時の変化、場面の変化、個別体験から一般化への変化等構造面に意識を集中し、多様な意味を持つ漢字一語に文脈上での的確な意味を付与しなくてはなりません。これも結局時間がかかります。



さてそんな中アゴラの生徒の得点は驚異的です。国語だから私が関与している。全くしてないとは言いませんがむしろ、左の写真に秘密があるでしょう。センター演習（全教科）の結果を20回分ほど壁に貼り重ねています。

自主ゼミです。

アゴラでは「**学習環境**」を何より大切にします。学習環境を作り出す最たるものは「**生徒の主体性**」です。

主体的個人は他の主体的個人を触発します。そこで生まれる合目的な適度な緊張が更なる主体的個人を作り出していきます。

Point 7 生徒こそ良質な学習環境である。

時間割・年間スケジュール
講座案内 国語・数学・英語
重要事項

2019年度 AGORA 前期 時間割

	月	火	水	木	金	土	日	
	1F	1F	1F	1F	1F	1F	1F	
15:00						15:45	個人指導	
16:00						個人指導		
17:00						17:45		
18:00	個人指導	個人指導	個人指導	英語 (基礎) 構文読解 座波	個人指導	個人指導	個人指導	
20:00								
20:15	英語 (難関) 選抜高2 座波	国語 (難関) 選抜 上江洲	国語 (標準) 受験高2 上江洲	英語 難関 高3 座波	数学 難関 高2 岡本	国語 標準 高1 上江洲	数学 難関 高3 岡本	物理 (難関) 選抜 徳永
22:15								
23:00								

※時間割は変更する場合があります。その場合は事前に生徒の了解を得て行います。

日曜・祝日(含:振替休日)は原則休講とします。また定期試験期間中も休講です。定期試験一週間前の期間は開講します。但し履修進度に遅れが生じた場合は講師と相談の上開講を決定します。

アゴラでは学力の伸長を「良質な授業の提供」×「生徒の自学習時間の総量」と考えています。この観点から休息・自習時間の確保は成績伸長における重要な要件と認識しておりますのでご理解ご協力の程よろしくお願ひします。

なお講座数については定期試験、日曜祝日、8月後半10日間自学優先期、年末年始、旧盆等の必須イベントを除外した授業実数を算定の根拠としています。

年間スケジュール

2020年度				
前期	補習/自学自習	後期	2次直前 (高3のみ)	新学期開講
3月1日～8月23日	8月24日 ～8月31日	9月1日～1月17日(高3)	1月25日 ～2月24日	2021年 3月1日
		9月1日～2月28日(中3高1高2)		
26週		20週(高3)/26週(中3高1高2)	4週	

※大学入学共通テストは2021年1月16日・17日

下記講座案内は抜粋版です。詳しくはWEBサイト・別紙参照。

講座案内 国語

講座名：難関国語

対象：高3

古文分野 センター古文～東大論述問題までを扱います。特に単語・文法の基本事項は「忘れて覚えて」を繰り返して定着させることです。心もとない生徒には「解釈文法(テキスト)」も使って得点力の底上げを図ります。

現代文分野 東大・京大、その他の大学入試問題の良問を学習します。特に国公立問題に文脈を意識させるような良問が多いようです。中でも東大はすべての問が有機的に繋がっています。階段を登るように問題が設置され、最終問題では「鳥の目」で全体を俯瞰する力が要求されます。構造を読み、文脈に依拠した答案作成の成形練習を行なっていきます。

講座名：受験国語

対象：高校3年生中心

古文分野 このクラスを受講条件は古文文法(解釈文法)をひと通り終えたことが前提となります。特に敬語は厚みを持って説明します。何か一つ自信を持てば、学校での学習意欲も変わってきます。範囲はセンター古文を中心に扱います。

現代文分野 通底するテーマを意識し、構造的に文章を読む練習を行います。センター試験の良問と国立私立の隔て無く頻出テーマの良問をとりあげます。その中でもセンター小説は「出題意図」が見えてくると一挙に得点率が上がります。その「見る」ことを感覚的なものではなく、客観的方法論的にアプローチして行きましょう。評論文は言葉の置き換えレベルから、文脈依存の言い換えのレベルへの脱皮を目指しましょう。

講座名：標準国語

対象：高校2年生

古文分野 このクラスは関谷浩「はじめの一步」をテキストとして採用します。文法の全体像を掴まえたあとに同著者による演習問題を取り入れて古文の読解力を盤石なものにします。特に敬語と和歌は厚みを持って説明します。何か一つ自信を持てば、学校での学習意欲も変わってきます。範囲はセンター古文～最難関大を中心に扱います。

現代文分野 通底するテーマを意識し、構造的に文章を読む練習を行います。センター試験の良問と国立私立の隔て無く頻出テーマの良問をとりあげます。その中でもセンター小説は「出題意図」が見えてくると一挙に得点率が上がります。その「見る」ことを感覚的なものではなく、客観的方法論的にアプローチして行きましょう。評論文は言葉の置き換えレベルから、文脈依存の言い換えのレベルへの脱皮を目指しましょう。

講座名：初級国語

対象：中学・高校全学年

古文分野 このクラスは古文の文法をわかりやすく解説します。単語から短文へと無理なく理解し、学校テキストレベルの古文読解を容易にします。テキストは「解釈文法」を使用し、読解の科学的アプローチの素地を作ってもらいます。

現代文分野 通底するテーマを意識し、構造的に文章を読む練習を行います。中学生に必要なことは運動としての読みに慣れることです。「見る」ことを感覚的なものではなく、客観的方法論的にアプローチして行きましょう。評論文は言葉の置き換えレベルから、文脈依存の言い換えのレベルへの脱皮を目指しましょう。

講座案内 数学

講座名：難関医進数学

対象：高3理系（東工大・難関大医学部）

本番で確実に得点できるようにすること。部分点獲得はこれを大いに重視する。

講座名：標準数学

対象：高2（高3）

一年生範囲で重要なところは「整数」と「確率」ということになり、今までもそこに重点を置いてきました。そして「整数分野」の勉強は現在も続いています。ここは早いうちにたくさん問題に当たって若い頭脳で慣れてた方がいい分野なのでもう少し続くことになると思います。2年範囲では、「ベクトル」、「数列」、「微積の概念の獲得」が重要な分野でしょう。

講座名：初級数学

対象：高1高2

数学1～数学2のしっかりとした土台がためをしていきます。今後の数学の得意不得意を決めていく大切な講座です。しっかり復習し、できるだけ予習もして授業に臨んでいきましょう。

講座案内 英語

特記事項：各講座とも、生徒の履修状況に応じて細目を決定する。内容は講座概要に記されている範囲に沿って行う。

講座名：難関大英語

対象：高校生

講座概要：

英語を構造で見る能力に加えて、文脈で単語の意味を決定する東京大学及び難関大学の入試英語に対応できる実力を養成するための講座。

講座名：受験英語（英語構文）

対象：高校生

講座概要：この講座では、英文解釈の基礎から応用への橋渡しの授業を行う。基礎の英語構文では、英文のパターンを文型や基礎的構文の理解を深め、逐語的訳から構造的訳の基礎を養成し、応用編では難関系の英語に必要とされるレベルの養成を行う。

講座名：基礎英語（英語構文・英文法）

対象：高校生

講座概要：

英語構文では、英文のパターンを文型や基礎的構文の理解を深め、逐語的訳から構造的訳の基礎を養成する。履修済みの英文法を演習で基礎的知識を確認・定着を図る講座。

重要事項

重要Ⅰ [講座数の根拠]

日曜・祝日は原則休講とします。また定期試験期間中も休講です。定期試験一週間前の期間は開講します。但し履修進度に遅れが生じた場合は講師と相談の上開講を決定します。

アゴラでは学力の伸長を「良質な授業の提供」×「生徒の自学習時間の総量」と考えています。この観点から休息・自学習時間の確保は成績伸長における重要な要件と認識しておりますのでご理解ご協力の程よろしくお祈いします。なお別紙料金表における、授業料の算定につきましては、定期試験・日曜祝日・8月後半2週間自学優先期・年末年始・旧盆等の必須イベントを除外した授業実数を根拠としています。

重要Ⅱ [東大クラス及び難関大・医進クラスについての説明]

1：1の個人指導に競争原理を加えたクラスです。1ユニットはモチベーションを高めあえる2名～3名のメンバーに限定し、生徒個人の現状学力を高める授業を行います。講師は生徒とのやり取りを通して生徒のレベル・学習履歴・メンバー間の共通課題を把握した上で指導を進めていきます。その時時、個人の学習状況に利する最良の課題を提供し、自主学習を促進させることで学校授業・アゴラ授業で最大の効果を生むように配慮します。

なお、このクラスはクローズドクラスを前提としています。東京大学医学部（東大クラス）及び旧帝大・難関医学部（難関大医進クラス）志望に最大限のバックアップ体制を取ります。

現生徒に遜色のない客観的資料・意欲をもつ希望者があれば、模試成績・面談行った上でユニット参加の可否を総合的に判断させていただきます。

重要Ⅲ [自主ゼミについて]

理系に進む生徒にとって不安のもとには国語です。今年の国語は共通一次・センター試験を通して最も平均点の低い最難の年となりました。そんな中での平均偏差値 63.5 は特出すべき数字です。「主体性」を持つものが「自主ゼミ」でいっそう実践力を培ったことは想像に難くありません。これは私の教え子であれば皆体験していることです。これが「学習環境第一」を唱える理由です。

重要Ⅳ [季節講習会について]

春期講習・夏期講習・冬期直前講習については下記の理由により、実施しません。尚、授業は通常通り行います。

- ① 複数の塾・予備校、さらに学校の季節講習会に参加する生徒にとって、予習・復習の時間を考えた時、いずれも消化不良になりかねない。そこから、「授業を受けていれば力がつく」という誤った考えがはびこり、生徒の「主体性」を阻害しかねないこと。
- ② そもそも「学習」は連動、そして継続という流れがあってはじめて、相乗的に効果が上がるものと考えます。講習会を実施することでその流れの分断が生じる危険性も持っています。
- ③ ご家庭の経済的負担軽減にもつながる。
- ④ 今年度の生徒の実績を見れば明らかですが、講習会がないことで、自分自身のスケジュール管理に余裕ができ、その結果、学習時間が大幅に増え、高得点につながった。

但し、「アゴラ国語」は「生徒の主体性を尊重する場」としての役割を担うと同時に民間の教育機関でもあります。生徒の意見、講師の考え、ご父母のご理解を頂いて、実施の必要性が生じれば、「短期集中講座」や、希望の生徒には「個人指導」も実施したいと考えています。その時はご理解、ご協力をよろしくお祈いします。

重要Ⅴ [適正人数について]

教室のキャパシティ、講師と生徒との不即不離の関係を円滑に保つことを勘案すれば、各講座5名程度が望ましいと考えています。

重要Ⅵ [費用について]

アゴラ開講より在籍いただいた皆様にご場をお借りして心より感謝申し上げます。そのお陰をもちまして昨年度の運営も滞り無くスムーズに行われました。たとえご子息の教育のためとはいえ、このご時世、過分なご負担になったことは想像に難くありません。

今年度は料金体系を抜本的に見直し、年度内の支払総額は県内大手予備校に準ずるか、一部単科塾の支払総額より安い単科設定とさせて頂いております。また先般お知らせいたしました消費税の加算につきましては県内の経済活動の停滞を鑑みて据え置きとさせて頂いております。

授業の質は講師の力量と生徒の作る向学的雰囲気にかかってきます。講師の質は掛ける対価で優秀な先生は集います。買えないのは生徒の作る「学習環境」です。同じ講師でも他塾とアゴラで評価が全く違うのは、生徒の作る「学習環境」が講師の引き出しを存分に引っ張りだし、講師もそれに応えるという理想的な学習環境がアゴラにはあるからだと思っています。

「生徒こそ最高の学習環境」ならば、誰かれ構わずということにはならないわけで、主体的な学習者への脱皮を求める生徒にアゴラに入塾していただきたいと考えています。

おこがましいのは承知のうえですが、もしそのような塾に興味がおありの方がいらっしゃいましたらご紹介いただけたら幸に存じます。

重要Ⅵ [費用の返金等について]

お支払いいただいた費用につきましては、原則として返金いたさないものとします。法的根拠につきましても下記のとおりとなります。

当校は過卒生も通塾する教育機関ですので、特定商取引法上の「特定継続的役務提供」に該当せず、規制対象とはなりません。

但し、当校の事情による債務不履行につきましては不履行分の返金を致します。また生徒事情に社会通念上返金の義務があると考えられる場合は、話し合いによって解約する合意解約をいたすものとします。

別紙「2020年度 AGORA 国語 料金表」参照。

重要Ⅶ [1:1 個人指導及び1:2or3 ユニット個人指導について]**1:1 個人指導 (完全生徒対応指導)**

one-to-one lesson です。生徒個人に対応したカリキュラムで目標に向けて「今」「必要な」指導を「生徒の理解」に応じた指導を、国語：上江洲、数学：岡本、英語：座波が責任をもって行います。

1:2or3 ユニット個人指導 (個人指導×2or3名)

1:1の個人指導に競争原理を加えたクラスです。1ユニットはモチベーションを高めあえる2名のメンバーに限定しクローズドクラスとします、競争意識が働くことで生徒個人の現状学力に最も適した授業が提供出来ます。国語：上江洲、数学：岡本、英語：座波が責任をもって行います。

効果

講師は生徒とのやり取りを通して生徒のレベル・学習履歴・メンバー間の共通課題を把握した上で指導を進めていきます。その時々、個人の学習状況に利する最良の課題を提供し、自主学習を促進させることで学校授業・アゴラ授業で最大の効果を生むように配慮します。

3ヶ月1クール制

基幹教科履修には、他教科との学習バランスが非常に重要となります。最低3ヶ月の継続がなければ

本質理解・難関大対策・弱点克服等はできません。ですから、「アゴラ国語」では短期集中のために3ヶ月を1クールの基礎期間として設定します。「3ヶ月で最低でも1つの自信を」を生徒との合言葉に、目標達成に向けた最善の努力を行います

指導料等費用

個人指導料金は「アゴラ国語個人指導料金等重要事項について」(別紙参照)の料金表に基づき、ご相談の上決定していきます。尚個人指導継続の場合、継続割引がございます。

学習スケジュール (例)

指導内容が明確で三者のコンセンサスがとれている場合は提示しない場合もあります。

国語個人指導専門 アゴラ

第Ⅱ期 学習スケジュール

●学習スケジュール

お子様の現在の学習課題を明確にし、目標までに必要な学習内容、使用教材、指導回数などを設定した個人指導の授業計画書です。お子様の学習状況により、内容を変更・修正する場合があります。

連絡先: 080-3908-1019

itotti17hawaii@gmail.com (iphone)

itotti17hawaii-1108@ezweb.ne.jp (keitai)

指導担当者: 上江洲 朝也



指導例

●基礎情報

生徒名: _____

在学: 昭利薬科大学附属 高校

学年: 高校3年

テーマ: 指導目的 早稲田大学文化構想学部 合格するに足る国語得点力の伸長
今期のテーマ 明治期特有の近代文語文に慣れること

教科: 現代文・古文・漢文

時間数: 24時間(全12回)

指導形態: 1対1指導

志望大学・学部

1	早稲田大学文化構想学部
2	早稲田大学文学部
3	上智大学文学部
4	同志社大文学部

●学習スケジュール (個人指導+家庭学習)

スケジュール

Start	今期の学習テーマに向けて		
現在の学習の到達度・課題は...	第1期	第2期	第3期
	内容	内容	内容
文化構想学部 大問2 (評論文) の得点は70%以上で安定しています。大問3 (現古漢融合問題) も過去問対策初期の段階としては50-60%で特に問題はありません。ただし、古文漢文の基礎の素養は今後積み上げていくものなので、学校・予備校の授業を大切に下さい。	1 早稲田文構・2011年度演習解説②	1 早稲田文構・2007年度演習解説②	1 一橋大 近代文語文②
課題は大問1 (近代文語文) をどう対策していくかということです。出来るときは1回目70%以上取れ、間違えた問題の検討会で必ず正解を導きます。出来ないときは、mixということもあります。1回目で読めないのは「慣れ」と「ポイント」のスキヤニング (飛ばし読み・キーワード拾い読み) を意識してないだけです。今後さらに早く筆者の「主張」にアクセスする訓練をつみましょう。	2 早稲田文構・2008年度演習解説①	2 早稲田文構・2012年度演習解説①	2 「近代文語文問題演習」①
個人指導では... 早稲田文化構想に特化した指導を行います。内容は過去問中心ですが2007年からの新学部ですので数に限りがあります。特に苦手な近代文語文は慣れが必要ですので、同様の問題を出題一橋大の問題などで更なる得点力の伸長を目指します。また「近代文語文問題演習」(駿台受験シリーズ)や「京大入試対策近代文語文例集」(駿台受験シリーズ)等の市販問題集でも実践力をつけていきます。	3 早稲田文構・2008年度演習解説②	3 早稲田文構・2012年度演習解説②	3 「近代文語文問題演習」②
家庭学習ならびに自習では 必ず復習して下さい。また近代文語文への慣れの対策として福澤諭吉や中江兆民の著作(口語訳・注釈があいまいなおよい)等で日頃から読みの訓練と近代知識人たちの思想を明治維新と西洋近代化の潮流という、その背景から理解するようにしましょう。	4 早稲田文構・2007年度演習解説①	4 一橋大近代文語文 福沢諭吉 等①	4 原典研究 (『学習のススメ』等)
	メ 過去問演習・解説・検討会で年度2回をみていますが、難度によっては1課にまとめることもあります。その分を近代文語文学習にまわすことができます。	メ ここまで、早稲田過去問はすべて終了ということになり、早稲田文化構想の全体像は把握できたこととなります。文化構想の根幹にある哲学まで理解できてくるでしょう。	メ 下記内容に関連しますが、大学が近代文語文を出し続ける意味を知った上で、「原典」を読む習慣を保つ必要があります。

教材: 過去問・「近代文語文問題演習」・「京大入試対策近代文語文例集」(駿台受験シリーズ) 等

注記事項: 現状は左記報告どおり、大問による得点のばらつきがありますが、「慣れ」と「演習量の不足」が原因ですので経験値を上げれば合格点付近で安定します。_____の良い点は「アドバイスを素直に聞き入れる力」と「真面目に課題に取り組む姿勢」そして何より「目標に向かって淡々と努力する一途さ」にあると思います。早稲田の場合は早く試験慣れするという近視眼的な姿勢では他の受験生と変わりません。明治期の大変革期にいたる日本人が自らのアイデンティティを保持しながら主体的に西洋を受け入れていったかという「日本人」としてのプライドを、自尊心を失いがちな現在の日本人を叱咤激励する意味合いで比較対象としていることが分かれば必ずと読書の重要性に気づいていただけると思います。「根を深く、幹を太く」していきましょう。

アゴラ教育理念&メンター紹介

AGORA
Education Policy
&
Mentor

Tadashi Zaha
Ryukyu University



英語論文基礎

そもそも大学入試の英語は何のためにあるのだろうか？世界共通語の英語を異文化理解のツールとして使う。もちろんそれもあるだろう。大学とは未知へのアクセスの場だ。そこに集う多くの他者との交流を、更に超えるのが「万巻の書」の世界だ。英語が読めれば時空を超越する。たちどころに過去であれ彼方であれ、他者との交流の場が爆発的に広がる。

英語論文を読める。そんな学生を欲するのが大学ではないだろうか。最低限このレベルの英文は読めないともな学究の徒とは呼ばれません。問題作成者の本音のメッセージが大学入試問題である。アゴラにおける英語は英語論文基礎の位置づけで授業を行う。まずは文法、構文である。そこから論理的に英文の構造を読み解く力をつける。何にせよ「早い者勝ち」が英語の道である。『気合だ！』



Kazunari Okamoto
Kyoto University,
Department of Mathematics

直行数学

私が京都大学で見たのは「数学の天才」です。たいへん優秀な才能を持った、一握りの人たちです。そういう天才には及ばなくても、受験数学くらいは楽に解いて志望の大学へ直行で合格できるような名付けて「直行数学」を目指します。もちろん人類の遺産たる数学の勘所ははずさないようにするつもりです。それはペダンティックなものではなくどっしりした考え方ででも言うべきものです。

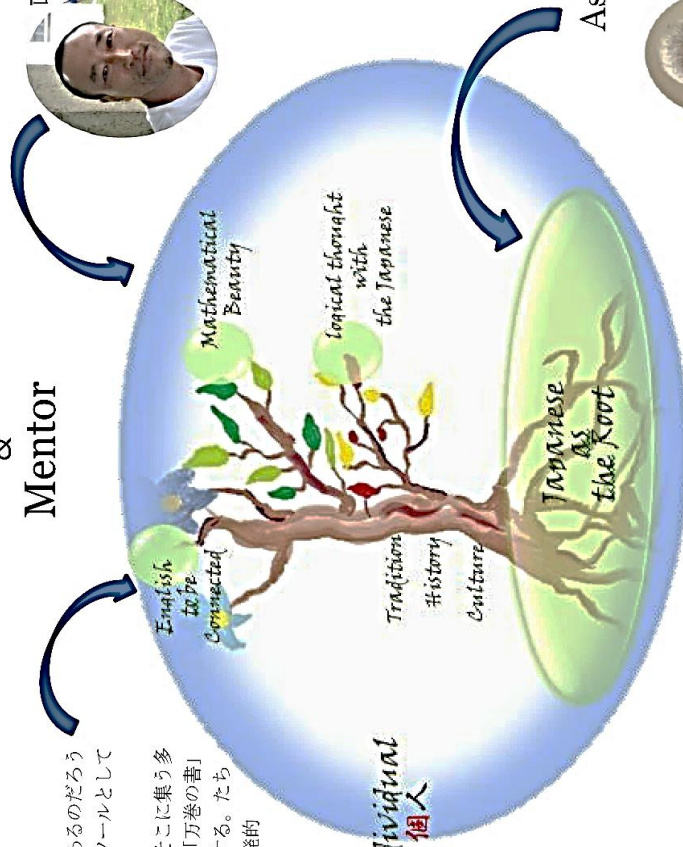
Asaya Uezu
Ritsumeikan University,
Faculty of Law



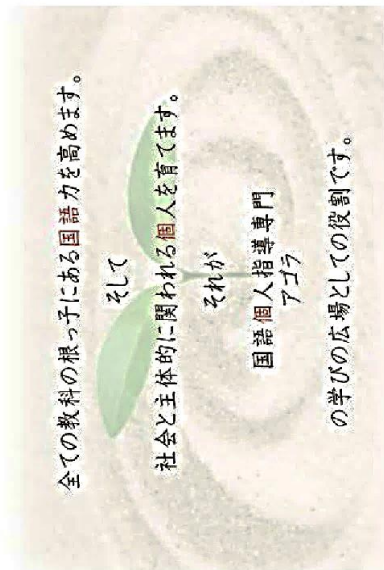
「対概念」と「場の設定」

これが答えだ。と納得した先に、かげろうのように「もっと深く読んでごらん」とおいでいである「さなる高み（深み）」が待っています。これこそが最高質の問題「東大現代文」です。「答えは動く」だから、いくらかでも考えられるし、考えることで世界が開かれる。そして、解答例や先生や、出題者さえも超える高みに皆さんが到達出来る可能性をさえ秘めている。

「運動としての思考」を通してのみ、世界は開かれます。模試の問題は予定調和の「閉じた世界」です。過去問こそが「開かれた世界」へと皆さんを誘うのです。開かれた世界で迷子にならないように「対概念」と「場の設定」を怠らないようにしましょう。



私たちはリーダーを育てます。
相手の立場にその場でチェンジできる
真のリーダーを育てます。



全ての教科の根っ子にある国語力を高めます。

社会と主体的に関われる個人を育てます。

そして
それが
国語個人指導専門
アゴラ

の学びの広場としての役割です。



大学入試改革についての私感

この入試改革は「大学入試改革」ではないということに気をつけなければなりません。「高大接続」のもとをたどれば、保育・幼小中連携の先の高等教育であるということです。

日本の場合、社会に出ると OJT（オン・ザ・ジョブ・トレーニング）で会社の仕事を協同的に行うことが求められてきました。しかしグローバル社会では専門教育で何を学び、どのような戦力となれるかが、アピールポイントになります。現在日本で行われている OJT では大学で何を学んだかはあまり問われません。そういう観点からすれば今回の改革には一定の理解は示せます。

ただし、テスト結果の情報、それは座学にとどまりません。各大学が個別に行う入学者選抜（以下「個別選抜」という）においては、入学志願者が高校教育で身に付けた「生きる力」、およびその中の3要素の一つである「確かな学力」をいかに大学教育で発展・向上させ学生を社会へ送り出していくか、そのためには大学の入り口段階でどのような力が求められるか、これを多面的・総合的に評価します。

「生きる力」は、「豊かな人間性」、「健康・体力」、「確かな学力」で構成され、「豊かな人間性」とは、国及び社会の責任ある形成者として必要な教養と行動規範を身に付けることをいいます。

「確かな学力」とは、

- ①主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度（主体性・多様性・協働性）、
- ②知識・技能を活用して、自ら課題を発見しその課題に向けて探求し、成果等を表現するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力、
- ③「知識・技能」で構成されます。

今回の大改革は「問題が解けないのではなく、もしかしたら問題の意味を理解していないかもしれない」生徒のみなさんにとっては、まさに「ふるい」の類に近いものなのかもしれません。でもこう考えることもできるでしょう。「今まで分かったつもりで文章を読んでいたことが、あらためて文章を理解することの難しさが分かった。それをクリアできたら必ず成績は向上する」

東ロボくん（AI で東大合格を目指すプロジェクト）で有名な新井紀子先生が主催者となり行うリーディングスキルテスト（RST）を受験することも検討しても良いかもしれません。

「日本語のルールに従って教科書の文章を読むことができない生徒がいるのではないか」という仮説からスタートした「基礎的な読む力」を測るテストです。

教科書などの基本的な文章はもちろん、図やグラフなどからも情報を読み取ることができるのか。

「リーディングスキルテスト」では、文章に書かれている意味を正確にとらえ、新しい知識を身につけるために必要な「骨太の読む力」を科学的に測定・診断します。

<https://www.yozemi.ac.jp/rst/>

ご承知の通り、記述式問題はなくなりましたが文部科学省の教育行政の方向性を示された例として次のページ以降で

「共通テスト」国語（古文・漢文を除く）出題例を大学入試センターより一部抜粋して転載します。

第1問

次の【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】は、まことさんが「ヒトと言語」についての探究レポートを書くときに参考にしたものである。これらを読んで、後の問い(問1～3)に答えよ。なお、解答の際に「指差し」「指さし」など、【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】で表記の異なる語については、どちらの表記でもよいものとする。

【文章Ⅰ】

ヒトは、ほかの人になにかを指し示すために指差しポインティングをする。驚く人もいるかもしれないが、これをするのはヒトだけである。ほかの動物はこうした指差しをしないし、指差しの意味も理解しない。チンパンジーでさえ、野生では、指差しも手指しもあることはない。ただ、人間のもとで飼育されているチンパンジーの場合は、人間の指差しを教え込むと、その機能がわかるようになる。とはいえ、教え込んでも、欲しいものに手を伸ばすことはあっても、それ以外ものを指し示すために指差しをすることはほとんどないようだ。

ヒトにとってはこれがいかに簡単な行為なので、ふだんは考えることもないのだが、指差しで指示されている方向とは、指差した人間からの方向である。見ている側は、その指差した人間の位置に自分の身をおかないかぎり(あるいはそれを想像しないかぎり)、指されている方向やものは特定できない(これは「他者の視点に立つ」能力とも関係している)。私たちにはこれが簡単にできるが、ほかの動物ではそうではないのだ。

ここで、ことばを用いずに、指差しも用いないで、頭や目の向きも用いないで、相手になにかを指し示したり、相手の注意をなにかに向けさせたりする状況を考えてみよう。これはきわめて難しいことがわかる(ほとんど不可能かもしれない)。それとは逆の状況を考えてみよう。ことばのまったく通じない国に行つて、相手になにかを頼んだり尋ねたりする状況を考えてみよう。

この時には、^A指差しが魔法のような力を発揮するはずだ。なんとと言っても、指差しはコミュニケーションの基本なのだ。

指差しは、ヒトでは生後11カ月頃から頻発するようになる。子どもは自分から指差しをし、またおとなが指差したのものにも目を向けるようになる。指差しは、自分の関心のあるものに他者の注意を向けさせるための(「注意の共有」を喚起するための)強力

な手段となる。これがいかに強力かつ自動的かは、「あっち向いてホイ」という遊びをしてみると、よくわかる。相手の指差した方向に目や顔を向けられないようにすることは、頭ではわかっているが、きわめて厳しい。

最初の指差しの出現から1カ月前かそれぐらいすると(1歳前後)、初語(注1)も出始め、この指差しの動作には単語がともなうことが多くなる。おそらく、こうした初期の指差しは、言語習得のひとつの重要な要素をなしている。

(鈴木光太郎『ヒトの心はどう進化したのか——狩猟採集生活が生んだもの』による。)

なお、一部表記を改めたところがある。

(注) 1 初語——乳児が初めて発する意味のある言葉。

【文章Ⅱ】

単語が意味を持つとは、指示対象が存在することを表している。名詞ならば、意味する事物が外界に存在する。子どもは「リ・ン・ゴ」と教わって、「リ・ン・ゴ」といえるようになっても、音の組み合わせが、くだんの赤い果物と対応していることがわからないと、「ことば」を話せることにはならないのである。

だから言語を習得するのに、大人と子どもが対面してコミュニケーションするばかりでは、不十分となってくる。一つの語彙を伝えるには、当のことばの指示対象が眼前になくしてはならない。つまり指し示すものを面前にして、かつ大人と子どもがともにそれに注意を向けつつ、指示する語を伝達して初めて、ことばの意味が伝わる素地がで上がるのだ。こういうように、周囲の大人の指示行為に理解が及ぶようになったとき、子どもは一般に、「三項関係が形成されるようになった」と発達上、呼ばれることが多い。

ただ、モデルである単語とその指示対象との対応関係の把握は、容易そうであるが実はさほどやさしい作業ではない。子どもの生活世界は、ものにあふれている。ある単語を耳にしたとき、彼らは無数の潜在的な指示対象の候補のなかから、適切な一つを

選択しなければならないのである。しかも大人は、英語の先生が生徒にしてみせるように、本を手にとって「This is a book」と教えてはくれない。

おのずと子どもの方から積極的に、「コロナ」とたどたどしくとも答えを大人に求める必要に迫られることとなる。そこで、子どもが身体的動作による指示行動を行うようになるかどうか、ということが、言語習得の上でたいへん重要な意味を持つこととなる。だから「指さし」の形成が求められることとなる。

指さしとは、外界の対象物を定位しつつ腕を伸ばして「あれ」と指し示す行動のことである。地球上のおよそ八割以上の文化内で、人は人さし指を伸展させることで指示行動として用いているといわれている。この事実から、ヒトを他の生物から分かつ特徴の一つは、自分の身のまわりにある、さまざまな事物の存在を他者に伝達しうる点にあると、古くからいわれてきた。また、単に存在を伝えるばかりではない。対象を自己と他者がともに知覚し、対象がもたらす同一のイメージを持つ機会が提供される。結果として個々人の心のなかの認識世界に、何がしか互いに分かち合い、文化と呼べるような現象が芽ばえる素地が与えられる。特定の対象への関心が共有される素地をはぐくむ点で、指さし行動の出現は発達的にエポックメイキングな出来事と考えられるのである。

(正高信男『子どもはことばをからだで覚える メロディから意味の世界へ』による。)

(注) 1 エポックメイキング——画期的。新たに一つの時代を開くようなさま。



問1 【文章Ⅰ】の傍線部A「指差しが魔法のような力を発揮する」とは、どういうことか。三十字以内で書け(句読点を含む)。

(次は問1の下書き欄。解答は必ず解答用紙に書くこと。)

下書き欄

	5
	10
30	15

問2 「ヒトはどのように言語を習得していくのか」という問題について考えを進めたまことさんは、【文章Ⅰ】の傍線部B「初期の指差しは、言語習得のひとつの重要な要素をなしている」ことについて、【文章Ⅱ】に詳しく述べられていることに気付いた。そこで、【文章Ⅱ】の内容を基に、子どもが「初期の指差し」によって言語を習得しようとする一般的な過程を次のようにノートに整理してみた。その過程が明らかになるように、空欄に当てはまる内容を四十字以内で書け(句読点を含む)。

【初期の指差しと言語習得】

ある単語を耳にする。

←

子どもは無数の候補の中から適切な一つを選ぶ必要が生じる。
しかも

大人は

←

だから子どもは積極的に指差しをする。

問3

「ヒトの指差し」と指示語についても考えたまことさんは、次の【資料】を見つけ、傍線部「指されたものが、話し手が示したいもの」と同一視できないケースがあることを知った。まことさんは、「話し手が地図上の地点を指さす」行為もこのケースに当てはまることに気づき、【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】に記された「指差し」の特徴から、なぜ「同一視できないケース」でも「話し手が示したいもの」を理解できるのかについての考えをまとめることにした。まことさんは、どのようにまとめたと考えられるか。後の(1)～(4)を満たすように書け。

【資料】

「話し手が何を指しているか」を明確に示すには、「あれ」「これ」「それ」のような指示詞や、「あの」「この」「その」を伴う一般名詞を使って、いわゆる「指さし」のジェスチャーを伴わせるのが有効です。しかし現実には、そうやって指されたものが、話し手が示したいものと同じ視できないケースがいくつかあります。一つには、指さしによって指されたものが、それ自体、文字や写真など「何かを表すもの」である場合です。たとえば、レストランのメニューに載っている料理の名前、あるいは料理の写真を指さして「これにしよう」と言った場合、「これ」で指示されているのは指さしの直接の対象である文字や写真そのものではなく、文字や写真が表している料理です。

(川添愛「自動人形の城 人工知能の意図理解をめぐる物語」による。)

(注) 1 指示詞——「指示語」のこと。

- (1) 二つの文に分けて、全体を八十字以上、百二十字以内で書くこと(句読点を含む)。
- (2) 一文目は、「話し手が地図上の地点を指さす」行為が「指されたものが、話し手が示したいもの」と同一視できないケースであることを、【資料】に示されたメニューの例に当てはめて書くこと。
- (3) 二文目は、聞き手が「話し手が示したいもの」を理解できる理由について書くこと。ただし、話し手と聞き手が地図の読み方について共通の理解をもっているという前提は書かなくてよい。
- (4) 二文目は、「それが理解できるのは」で書き始め、「からである。」という文末で結ぶこと。

正解は HP よりダウンロードして御覧ください。

https://www.dnc.ac.jp/albums/abm.php?f=abm00035541.pdf&n=0401_%E6%AD%A3%E8%A7%A3%E8%A1%A8_%E5%9B%BD%E8%AA%9E.pdf

設問解説

問1 【傍線部を説明する問題】(30字以内)

「指差しが魔法のような力を発揮する」とはどういうことか。という問いである。

「魔法のような力」が指し示す実際的な効果を問うていて、それがなぜ魔法と言えるのかまでは問うていない。一般的な記述式問題の場合、この問題なら、魔法のような力の実質を端的に述べ、「魔法のような」という比喻表現を用いる理由まで説明するのが本来の指導現場である。

このでの問題を繰り返し学習しても2次試験の問題に太刀打ちできない。むしろ表面的にすぎるあまり「文脈に依拠した意味」を捉える学習姿勢から遠のくことが予想される。

「高い山」に登る訓練は「低い山」に登るときでも決して侮ってはならない(問題の要求を理解する)という教訓とともに「低い山」に登ることを可能にする。

問2 【文脈を整理した図式の空欄を補充する問題】(40字以内)

この問題は、文章の整理から図式化するという新傾向を意識した問題となっているが、図式化自体が平易で、高校レベルは名折れである。図式が捉えているのは、第3段落と第4段落の冒頭だけであり、ほぼそのまま抜き出しても正答となる。

記述式問題を入れる目的そのものが問われる。情報を抜き出して並べるだけで、深い思考が必要ないのであれば、従前のマーク式のほうがまだ考えることの現実に適応している。

問3 【新しく発見した事例についてその理由を複数のテキストの内容をもとに説明する問題】(80字以上120字以内)

この問題は、言語論から記号論への知識の広がりを意識した問題と言える。現実実感に即した文章だから読みやすかっただろうし、「世界を見る目」を養う意味で良い問題であった。言葉を習得する際には、指し示す対象物がそこになければならないが、習得してしまうと、対象物がそこになくても、言葉だけでコミュニケーションができる。

言葉を習得すると、その言葉が指示するものが、必ずしも話し手が指示したいものと同一視できないことがある。話し手は実際のリンゴを思い浮かべているが、話し手が紙に書いたリンゴの絵やリンゴという言葉は、実際のリンゴではない。しかし、それでも聞き手との間にコミュニケーションが成り立ち、聞き手は実際のリンゴを想像することができる。それは、私たちが他者(話し手)の視点に立つことができるからであり、他者(話し手)と同一のイメージを持つことができるからである。

まことさんは、リンゴの絵ではなく、地図上のある地点を例に挙げて説明する。前半は、地図上の地点を指さした場合、話し手が思い浮かべているのは、地図上のある一点ではなく、実際の場所であるが、それを聞き手は理解することができるという内容が書ければよい。後半はなぜ聞き手はそれを理解できるのかを、文章Iあるいは文章・の適当な部分を使って説明する。

本文の内容(「世界を見るための入り口」)に即した良問である。

考察

①問われていることが何であるのか設問の意味(出題者の要求)を読み取ることに神経を集中する。

⇒最近の生徒を見ていると問題自体の意味がわからない生徒も増えている。これは先に示したRSTも参考になる。

②時間内(100分)で問1「記述」、問2「資料読み取り」、古文、漢文をやり通すのは困難である。ここで安易に対策を述べることは避ける。まずは習うより慣れろである。

アゴラへのWeb アクセス

① アゴラ国語ホームページ



② 主宰 BLOG 『Aloha! 予備校講師は語る...』



③ 合格体験記『Agora 国語... 合格への道...』



④ アゴラ国語 時間割



CHANGE



お問い合わせは
こちらから



098-943-8876



agora.kokugo@gmail.com